

17. 術前化学療法後進行下部直腸癌における CD133 発現の免疫組織学的検討

¹⁾ 埼玉医療センター 外科,

²⁾ 同 病理部

大井 悠¹⁾, 奥山 隆¹⁾, 竹下恵美子¹⁾,
三ツ井崇司¹⁾, 野呂拓史¹⁾, 小野祐子²⁾,
野家 環¹⁾, 伴 慎一²⁾, 大矢雅敏¹⁾

【目的】近年、癌の転移・再発や、薬剤・放射線の耐性にがん幹細胞が重要な役割を担っていることが判明している。マーカーの一つとして、CD133 が有用であると報告されている。本研究は、オキサリプラチンをベースとした術前化学療法を施行した進行直腸癌症例における、CD133 発現の術後再発予測因子としての有用性を検討した。

【方法】2010年4月から2018年6月の間に、当院で術前化学療法を施行した後に根治切除術を施行された下部進行直腸癌（cT3/4 かつ/あるいは Nany かつ M0）52例を対象とした。術前化学療法はオキサリプラチンをベースとして、基本レジメンを SOX + CET 療法 2 コースとした。手術は鏡視下切除が 44 例（84.6%）、開腹手術が 8 例（15.4%）であった。生存曲線については、Kaplan-Meier 法を用い、有意差検定には log-rank 検定を用いた。単変量・多変量解析には Cox 比例ハザードモデルを用いた。いずれも p 値 0.05 未満を有意差ありとした。

【結果】CD133 高発現は 22 人（42.3%）に認めた。CD133 高発現群は CD133 低発現群に比べ、静脈侵襲や down staging（T 因子、N 因子）、再発に強く関与していた。全対象の 4 年無再発生存率（RFS rate）は 67.4% で、CD133 低発現群は CD133 高発現群に比べ、有意に良好な結果であった。一方、RFS rate に関する単変量解析ではリンパ管侵襲、外科的剥離断端（CRM）陽性、リンパ節転移陽性、術後補助療法の実施、N 因子の down staging、CD133 高発現が候補リスク因子として抽出され、さらに多変量解析では、CRM 陽性、CD133 高発現が独立した有意なリスク因子であった。

【考察】今回の検討で CD133 高発現は、CD133 低発現群に比べ良好な RFS rate を示した。さらに、多変量解析においても、CD133 高発現群は術後再発の独立した有意なリスク因子であった。よって、術前化学療法を施行した症例において、治療前生検材料の CD133 発現が再発の予測因子であることが示唆された。

【結論】CD133 発現は、術前化学療法を施行した進行下部直腸癌症例において、再発の予測因子となる可能性が示唆された。

18. 当センターにおける SSP 電極を用いた後脛骨神経刺激療法の検討

排泄機能センター

鎌迫智彦, 加賀勘家, 加賀麻祐子, 布施美樹,
石塚 満, 山西友典

【目的】後脛骨神経刺激療法は仙骨神経叢を介して骨盤底の神経調節を行い、過活動膀胱（OAB）や神経因性膀胱に有効であることが報告されている。本研究では、難治性 OAB における SSP 電極を用いた後脛骨神経刺激療法の有用性を検討することを目的としている。

【方法】薬物治療で改善が得られなかった難治性 OAB 患者 29 例を対象とした。本研究は前向き研究で、対象患者に 1 回 30 分の刺激治療を、6 週間に週 2 回（合計 12 回）施行した。脛骨神経の刺激部位は三陰交（SP6）で、両下肢の同部位に SSP 電極を、照海（KI6）に基準電極を置いた。刺激条件はパルス幅 50 μ sec、双方向性対称波の低周波通電とした。主要評価項目は過活動膀胱症状質問票（OABSS）の合計スコアの変化量とし、副次評価項目は国際尿失禁会議 QOL 質問票（ICIQ-SF）の合計スコアの変化量、排尿日誌における昼間排尿回数、夜間排尿回数、尿意切迫感回数、尿失禁回数、最大 1 回排尿量、平均 1 回排尿量とし、治療前後で評価した。

【結果】2 例の脱落にて、27 例（男性 20 例、女性 7 例）を解析対象とした。年齢は 64.9 ± 18.0 歳（8-92 歳）であった。主要評価項目の OABSS 合計スコアは治療前 8.8 ± 2.8 点、治療後 6.6 ± 3.4 点で有意に減少した（ $p = 0.0006$ ）。副次評価項目の ICIQ-SF 合計スコアは治療前 8.9 ± 5.2 点、治療後 6.5 ± 5.6 点で有意に減少した（ $p = 0.0063$ ）。排尿日誌では尿意切迫感回数と尿失禁回数の有意な改善を認めた（ $p = 0.0228$, $p = 0.0157$ ）。有害事象は 1 例（3.4%）に疼痛を認めた。

【結論】難治性 OAB における SSP 電極を用いた後脛骨神経刺激療法により、OABSS と ICIQ-SF の合計スコアと排尿日誌における尿意切迫感回数と尿失禁回数の減少が認められ、同療法が有用である可能性が示唆された。